

「田園調布学園大学大学院共同研究助成報告書」

研究題目

子どもの育ちを読み解く手がかりとしての
「スタンス」の構成過程の関係論的分析

研究代表者

共同研究者

高嶋景子

佐伯胖

【研究の背景】

従来、保育の場における子どもの育ちは、個々の子どもの能力の獲得等による行動特性の変化として語られがちであった。そのため、他者とのかかわりにおいて「気になる」姿が見られる場合、その個人が当該集団における社会的規範や行動様式を身につけることによって、その既存の集団に「適応」していくことが期待され、その規範や行動様式の獲得のための指導原理が探究されてきた。そのような関係構造を社会的・歴史的な文脈に即して読み解いていく必要性を指摘し、そのための有効な視座の一つとして提唱されたものに、Lave, J. & Wenger, E. (1991) の「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation:LPP)」論があるが、「学習」を、その主体の関与する実践共同体における「参加 (participation)」過程として読み解くことを提案したこの概念についても、「アイデンティティ構築を十分に複雑な過程として叙述するための理論的装置」が不足していたとして、「優位な実践共同体が用意する『期待される成員像』に学習者が従順に向かっていく過程 (とその失敗) かのようになされてしまう」という課題への指摘もある。しかし、本来、正統的周辺参加論は、「隙間的共同体」や「多重成員性 (multimembership)」の概念によってWengerが提起していたように、共同体の持つ重層的で複雑な構造に着目し、多様な参加の軌道を描き出すことを意図して、提案されたものであり、その多様な参加の軌道と共同体の複雑な関係構造を十分に描き出すためには、改めて、Wengerらの提起している概念の整理及び再検討と、それらを援用して関係論的な分析を深めていくための手掛かりを探ることが求められていると考えられる。

【研究目的】

そこで、本研究では、保育の場における子どもの育ちを読み解いていく上で、その子を取り巻いている共同体の多重的構造に着目し、その子の「参加」の過程を特定の単層的な共同体内での「位置」の変化としてではなく、重層的な共同体の中で、自分なりの参加の向かい方 (「スタンス」) を模索し、構成する過程として捉えることを試みる。大小様々に折り重なり合う複数の共同体の中で、そこへの参加の仕方を自ら模索しながら、その参加を深めていこうとする主体の側の志向性と外的制約の両面を視野に含めて、参加する側とされる側、それぞれの模索による相互交渉と、それによって絶えず変化し揺れ動いていく中で生まれる共同体の総体を描き出すために、「スタンス」という新たな分析の視点に着目することによって、子どもたちの多様で複雑な育ちの過程を描き出し、それを支える周囲の関係構造の在り方について問い直すための示唆を得ることを目的とする。

【研究方法】

- ①幼保連携型認定こども園 (神奈川県横浜市内Y園) の乳児クラスにおいて予備観察を実施。保育場面における子どもたちのかかわりを基に、乳児期の子どもたちの共同体の構造と、それぞれの子どもの「参加」過程に着目し考察を行った。
- ②重層的な共同体における「参加」過程を読み解く鍵概念として、Wenger (1998) によって提起された「多重成員性」についての概念整理を行い、それを基に、過去の事例に関する再分析を行った。

【研究結果】

Wenger (1998) は、人は多くの場合、同時にいくつもの共同体に参加していることを指摘し、そのために、共同体の成員性は、複数の共同体の成員性の重なりで構成されているとして、そのような成員性を「多重成員性」と名付けた。この「多重成員性」に着目して、保育の場における子どもの「参加」過程を読み解いていくと、その過程はその場に生成されている公式・非公式の様々な共同体間を移動しながら、その重層的な共同体の中で自分なりの「参加」の在りよう（「スタンス」）を構成している過程であり、その「参加」は、決して、ある共同体における独立した単層的な参加過程として描けるものではなく、他の共同体における成員性やそこでの「参加」過程を背負って生まれてきているものであることが見えてきた。その結果、子どもたちの、それぞれの共同体における「参加」の位置や在りようを見る際に、特定の単層的な共同体内での関係構造の分析ではなく、その背後にある重層的に折り重なり合った共同体の内外の多重的な関係構造にも着目していくことの重要性が示唆された。（この点については、本年度に実施した幼保連携型認定こども園の乳児クラスにおける予備観察でも、1歳児の子どもたちのかかわりにおいて、入園時期や在園期間に応じた仲間関係の生成と、それらの関係に基づいて各々の「参加」が相互構成されている様子が観察されており、乳児期の子どもたちを取り巻く共同体も既に重層的で複雑な関係構造を持っており、その多重成員性に着目して「参加」過程を分析していく必要性についての示唆を得ることができた。）

【考察および今後の課題】

上記の事例の検討を通して、子どもたちの「参加」の持つ重層性が、共同体間の移動によって、別の共同体の実践へ新たな意味づけや展開をもたらす（実践の変容をもたらす）可能性があることも見えてきた。例えば、何らかの形で実践が固定化し、新たな意味の交渉が起こりにくくなっている共同体において、子どもたちの多様な「参加」が引き出され、それぞれが遊びの中でさらなる面白さの探究や、その探究に伴う挑戦・発見など、豊かな意味の交渉が起こる実践へと変容していく契機として、他の共同体において、様々な参加の在りようや、その面白さを経験し、手応えを得た経験を持つ子どもの存在や、その「参加」過程そのものが、大きな役割を果たしていたことも見えてきた。このような、それぞれの子どもたちの共同体における「参加」過程や共同体間の移動が、他の共同体の実践にどのような新しい意味や展開をもたらすかという点については、今後、さらなる分析を重ねていく必要があると思われる。そこで、今後は、特に、保育の営みにおいて多層的な場や時間の持つ意味に着目しつつ、乳幼児期の子どもたちの多様な「参加」過程を分析していくことを通して、人が複数の共同体に参加することの持つ意味や、それらの参加を支える周囲の関係構造や環境の在りようを問い直していきたいと考える。